26P-pm229

明治期理礼氏薬物と家畜医範の薬物比較

◯小松　知貴[1], 大垣　旭[1], 島　和嗣[2], 久保　光平[3], 畠山　貴博[4], 澤田　采佳[5], 木村　壮太郎[6], 小松　直登[7], 西野　ゆり[8], 林　優樹[9], 西野　正雄[10], 菰田　綾佳[11], 宮本　如奈[12], 高倉　弘士[13], 畠山　有理[14], 畠山　光弘[15]（[1]府立河南高校, [2]府立金剛高校, [3]四天王寺羽曳丘高校, [4]初芝富田林高校, [5]府立西浦高校, [6]府立藤井寺高校, [7]府立東住吉高校, [8]府立長野高校, [9]府立富田林高校, [10]早稲田大学(基幹理工), [11]関西福祉科学大学, [12]同志社大学(文), [13]立命館大学(産業社会), [14]長崎大学(薬), [15]畠山獣医科）

「目的」・・明治という時代は、急激に全ての文化が西洋化された時期である。我々は、医薬品に興味を持ち、江戸時代の漢方や生薬を中心とした時代から、現代の西洋医薬品一辺倒の時代になる時代の過渡期を見てみたいと考え、明治はじめの医薬品をまとめた理礼氏薬物学に基礎をおき、それより数年後 1867 年（明治 20 年）に駒場農学校獣医教師ヨハネス＝ルードウィッヒ＝ヤンソンと、その助教の田中宏が家畜医範を発行し、獣医学の基礎が出来上がった教科書的書物である家畜医範に登場する医薬品をそれぞれ整理し、比較することにより、明治という急速に発展した時代の薬使用の変化を読み取ることを試みた。

「方法」・・家畜医範は全一六巻あり、七～九巻が薬物学であるため、そこに登場する医薬品を全て数え上げ、理礼氏薬物学に登場しているか否か検討した。

「結果及び考察」・・中性薬、苦味薬、収斂薬を扱う第九巻では５２％、芳香薬、香辛薬去痰薬、利尿発汗薬、利尿薬、神経薬、寫下薬、寄生薬、子宮薬、動物性刺激薬、植物性刺激薬、樹脂質薬、焦質薬、植物塩基類を扱う第十巻では４８％、アルコール類, 酸類, 鉱物酸類, 有機酸類, 擬鉱類, 鉱類, アルカリ類, 純アルカリ類, アルカリ土類, アンモニア類を扱う第九巻では５７％、総数で平均して７７％が理礼氏薬物学に登場している薬品であった。現在でもそうだが、動物医薬品として認可されている薬は少なく、多くの獣医師が人間に認可された医薬品を、独自の判断で動物に使用しているが、明治時代では動物と人間の薬は区別されていない背景があった。また、理礼氏薬物学では、シーボルトが持ち込んだ薬品の多くが欠落している状況があるが、明治時代の僅か１５年の間に急速に使用されるべき医薬品が変化していった状況が読み取れ興味深いと言える。